
I can love myself

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I can love myself

【NZード】

N6256A

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

少年は愛されることをしらなかつた。ただ純粹に愛されたかつた。自分を愛してくれる人は一体どこにいるのだろう?

(前書き)

この小説はハリポタ親世代のお話です。シリウスがホグワーツ入学時です。

愛がほしかった。偽りなんかじゃなくて、作り物なんかじゃなくて、誰かのお下がりなんかじゃなくて……。俺だけに受けられる、眞実の愛が。

I can love myself

父さんや母さんに優しくしてもらつたためには、とにかく従順でいること。

「はい、父上、母上、」

なんてね。そうして笑顔でいればいい。物心ついた時には、それがもう染み付いていた。無意識のなかでもできる。心のなかで

「黙れこの野郎」

などと罵倒していても、外見上はにっこり笑つていられるんだ。

鏡の前に立つて、自分の姿を見つめる。

「母上」

が整えてくれた身なり。可笑しいほどきつちつした、パーティにでも行くような衣装だつた。

カレンダーを一瞥する。丸のついた日付。9月1日。今日は、11年間待ち焦がれた日だつた。自分の誕生日なんかよりも楽しみにしていた日。今日の11時に出る列車に乗つて、ホグワーツ魔法魔術学校に行くのだ。

ローブや杖や鍋なんかを詰め込んだトランクを引きずりながら、もう一度鏡を見る。

そこには、如何にも聞き分けのよさそうな少年が立つていた。張り付いた作り笑いは、まわりの大人たちのお気に入りだ。自分の

持つ全ての中で、この笑顔が一番目に嫌いだった。ワースト・ワンはもうらん、両親に気に入られようと振る舞う自分。

「行ってくるよ」

鏡の中の少年に言い、部屋を出た。

*

「何か困ったことがあつたら、フクロウ便を寄越しなさい」

「汽車発二分前、父さんが言つた。

「はい、父上」

「いつこりして言ひつ。

「週に一度は手紙をかくのですよ」

「こちらは、心配顔の母さん。

「はい、分かりました、母上」

やつぱり、いつこり。両親に向ける顔は、これさか持つていないのだから仕方ない。

レギュラスが何か言いたそうにしていたが、言葉を探せず、頑張れよ、とだけやつと口にする。

「父上と母上に迷惑をかけるなよ」

頭をくしゃつとして、再び両親に向き直つた。

「いってきます」

ほとんどの車両はもう生徒でいっぱいだった。結構な人数がいるもんだと、思わず感心する。

真ん中の車両の、男の子が一人で乗るコンパートメントを覗いて声をかけた。男の子の向かいの席を指差しながら。

「そこ、空いてる？」

男の子が一瞬きょとんとする。彼も一年生なのかも知れない。どこか安堵したような表情をして、頷いてみせた。

「君、一年？」

男子が聞いてくる。人懐こい笑顔に困惑しながら、答える。

「そう。君も？」

「うん。ぼく、ジョームズ・ポッターっての」

「ぼくは、シリウス・ブラックだ」

とりあえず、愛想よく笑つてみせる。ジョームズはじつといちらを見つめ、手を差し出す。

「え？」

「握手、しよ？ もしかしたら、同じ寮になるかもしれないし。これからよろしく」

「あ、ああ……うん」

あっけにとられて握手すると、ジョームズはここにまた笑顔になった。

その握手した手のなかで、何やらもぞもぞと動くものがある。

「うわっ？」

慌てて手を引くと、茶色い蛙 少し溶けた蛙チョコレートが飛び出した。

「あはははっ驚いた？」

ジョームズがけらけらと笑う。シリウスはチョコレートのひらとジョームズの顔と、窓をよじ登る蛙を見比べた。

「今、手品っていうんだ。マグルの遊びの一つなんだけど

「手品？ 魔法を使つたんじゃないのか？」

「うん。マグルは魔法を使えない代わりに、いろいろな仕掛けをして手品をするんだ。魔法には及ばないけど、暇潰し程度にはなるだろう？」

シリウスはようやく落ち着いて頷いた。

ジョームズはくしゃくしゃの黒髪を搔き上げながら窓を開ける。蛙チョコレートが窓の外に逃げる。吹き込んだ風が一人の髪をなびかせ、頬を撫でた。

「ポッター君、君、何でそんなに……」

「ジョームズでいいよ。堅つ苦しこの、好きじゃないんだ」

「じゃ、ジョーモズ。君はビリして、そんなにマグルのことに詳しいんだ？」

「マグルに詳しいわけじゃないよ」

ジョーモズは肩をすくめる。

「ただ、おもしろいことは好きだからさ。手品って、おもしろいとは思わないか？ ブラックくん？」

挑発するような顔になつて言つた。シリウスは少し目を丸くしたが、すぐにニヤリと笑つた。

「シリウスでいいよ。堅つ苦しいの、好きじゃないんだ」

シリウスはネクタイを乱暴にほどき、シャツの第2ボタンまで開けた。

二人で顔を見合わせると、どちらからとなく笑い出す。

多分、今まででいちばん自然に笑つているのではないか、と。

シリウスはそう思った。

*

組分けを待つ間の時間は、ひどく不快だった。今まで感じたことないフレッシャー。なぜこんなにも緊張するのかは分からぬ。どこの寮に入つたつて、別に構わないと思つていたのに。

両親はスリザリンに入ることを希望していた。……と言つよリスリザリン以外の寮なんて考えてもないだろうけど。ブラック家はいわゆる

「純血」

の血筋で、親族の殆んどはスリザリンの出身だった。

「純血」

がそれほど偉いとは思わない。むしろ、馬鹿馬鹿しいとさえ思つ。けれどスリザリンに入るのが嫌だというわけでもなかつた。スリザリンならば両親が喜ぶことは田に見えてくる。

「ジョームズ・ポッター！」

組分け帽子がよばわる。はつと顔を上げて見ると、ジョームズが確かに足取りで組分け帽子に近付いていく。ジョームズはこの寮になるんだろう。シリウスは彼を見つめながら思う。別にどこだって構わない。けれどジョームズと同じ寮だったなら、どんなに楽しいことだろう……。

「グリフィンドール！…」

わあっ、と歓声。ジョームズはグリフィンドール生に迎えられて、笑顔を見せていた。

グリフィンドールなら、いい。その笑顔をみて、シリウスは何とはなしに思う。でも、もしグリフィンドールだった時、両親はどんな顔をするだろう？　親子の縁を切られでもしたら、どうしよう？

「リーマス・ルーピン！」

シリウスの5つ前の生徒が名を呼ばれる。少し顔色が悪い。けれどその生徒　　リーマスの瞳は驚くほど強い光を持っていた。

「グリフィンドール！…」

ああそうか、グリフィンドール。シリウスはリーマスを見ながら呟く。彼のように強い眼差しで、前を見据えていけば、グリフィンドールに入れるだろうか？　ジョームズのように、にこにこと笑って進んでいけば、グリフィンドールに入れるだろうか？　どうすればブラック家の自分がグリフィンドールに入れるのだろうか

……？

「セブルス・スネイプ！」

シリウスの前の少年が無言で歩き出す。やや長めの黒髪が、わずかに揺れていた。その髪と同じ色の瞳。白い顔に張り付く暗い表情。

シリウスはセブルスの表情に、ギクッと身じろぎした。

どこかで見たことがある。誰かに似ている。そんな気がした。

「スリザリン！！」

わあっとスリザリンのテーブルが湧いたが、セブルスはあくまで低いテンションのままテーブルにつく。

ああ、もう、次だ。

心臓が高鳴る。広間のなかがわずかにざわついた。

「見て。ブラック家の子だ。彼は、スリザリンで決まりだろ？」「そんな声が耳に入つてくる。

僕がどここの寮に入るかなんて、まだ分からぬだらう……。勝手に決めつけるな！

そう、怒鳴つてやろうかと思つた。

両親に愛されたい。それならば、スリザリン。

ジエームズと同じ寮ならばいい。それなら、グリフィンドール。どちらに入りたいかなんて、もう自分ではきめられなかつた。

帽子を被る。鼻のあたりまでくる。

「ふうーむ、悩んでいるようじゃな。頭は悪くない。人並み以上の勇氣もある。親に愛されたいか。……しかし、自分を変えたいと思つてあるようじやな。それが、何より強い……。ならば、グリフィンドールッ！！」

はあ、そうですか。……え、今、グリフィンドールドールつて言つた？

きょとんとして帽子を脱ぐ。

生徒たち 特に、スリザリン生とグリフィンドール生 がざわざわと驚きを見せていた。けれど、一番驚いたのは、シリウス自身だ。何かの間違いでは？ と思わず考える。しかし、そんな考えは大きな拍手によつて吹き飛ばされる。 ジエームズだ。彼が手が真つ赤になるほど強く、拍手をしてくれた。つられて回りの生徒たちも歓声をあげた。

シリウスは笑顔になつて立ち上がり、手を振るジエームズの元に駆けていった。

*

寮の部屋は、四人部屋だった。シリウスの家の部屋よりは狭いけれども、気に入つた。何よりジョームズと同室だということがうれしい。

ほかのルームメイトは、先ほどの組分けで見たリーマス・ルーピンと、背の低いピーター・ペテグリューという少年だ。

シリウスは彼らと遅くまでおしゃべりし、日付の変わることに眠りに落ちた。

気がつくとシリウスは、グリフィンドールの談話室に立つていた。さつき通つたときにはなかつた、大きな鏡が置いてある。

鏡の中をのぞいて、シリウスはぎょっと後ずさつた。

そこにあつたのは両親の姿。無言でこちらを見ている。シリウスは着崩したシャツをきちんと直しながら鏡を凝視した。

「グリフィンドール、だつたそつだな」

父さんが冷たい声で言う。思わず息を呑む。こんなにも冷酷な表情をした父親を見たことがなかつた。

「……はい」

「我がブラック家からグリフィンドール寮の者が出てよつとは……」

「でも、僕は……」

「黙れ、シリウス。お前は我が家の恥だ」

「……ッ！！」

手足に力が入らない。冷や汗が流れた。

「ち、ちうえ……」

声が震える。両親はシリウスに背を向けて遠ざかつていった。

「父上！ 父上！ 母上！ ……待つて……父上つ……」

*

「シリウス……シリウス……」

頬に冷たい感触。誰かがしきりに名前を呼んでいる。

「シリウス！」

はつと目を開けると、ジョーモズの心配そうな顔が間近にあつた。

「あ……ジョーモズ……？」

「大丈夫かい？　ずいぶん嫌な夢でも見ていたようだけど」

「ああ……うん……。ごめん、起こしたか？」

「平気や。なかなか寝付けなかつただけだから」

ジョーモズは肩をすくめた。その仕草に、なぜか安心する。

「あのさあー、シリウス。……答えたくなかったら、答えなくともいいよ。でも、……もしかして君、親と何かあつた？」

「……寝言言つてた、僕？」

□元を押さえると、ジョーモズは苦笑してうなずいた。シリウスは深くため息をつく。

「……うちの親さ、僕がグリフィンドールだと知つたらたぶん、相当嫌がると思うんだよね。……知つてると思つけど……うちは代々、シリザリンの出身者が多い家系でさ……血筋を一番に考えるようなところがあるんだ」

あれは、予知夢だつたのかもしれない。朝にはふくろう便で、もう一度同じことを告げられるような気がした。

「幼いころから、親に嫌われないよう、とだけ考えながら生きてきたんだ。とりあえずいうことを聞いていればいろいろ『えてくれたし……」

自嘲。

自分はなんて厭味な奴なのだろう、と思つた。これではまるで、自慢話だ。聞かされるジョーモズの身にもなつてみる。そう自分に言い聞かせるが、一度話しかめたら止めることなどできなかつた。出会つて一日と経たないジョーモズに、こんな話をしてもどうしよう

うもないのに。

「でも、大人に媚を売る自分が大嫌いだつた。いつぞ家出でもできたら、どんなに乐だらう、とも思つた。でも、それもできなかつた。……頼る親戚も、友達も……行く当てが、ひとつもなかつたから」

話が進むにつれ、自己嫌悪が心の中を支配していく。せつかくできた友人なのに、これではジェームズに嫌われてしまつ……。

「馬鹿！ 阿呆！ ヘタレ！ 間抜け！ 人間のごみ！ クズ！…」

いきなりジェームズが大声で言う。シリウスは目を丸くした。

「今、君の代弁ね。……ひとつ聞くけど、君は親のこと、どう思つてるの？」

「どう、つて……」

「好き？ 嫌い？ 尊敬してる？ 恨んでる？」

「……たぶん、大嫌いだと思う。でも、そんな親にでも、愛されたかった」

シリウスは恥ずかしさと、情けなさと、悲しさで胸がいっぱいになつた。

けれどジョームズはからかうこともなく、あきれた様子もなく、ひどく穏やかに微笑んだ。何がおかしいのか、と反論する気にもなれず、シリウスはうつむく。

「本当のこと言うと、初めて君を見たとき、少し氣に入らなかつたんだ」

ジョームズはさらりと言つけれど、なかなか身にこたえた。シリウスは深い深いため息をつぐ。するとジョームズが、励ますように肩を叩いてきた。

「でも話してみると、すごくいい奴だつてわかつた。賢いし、正直で素直だし、ずっと話していく飽きない人つて、君が初めてなんだ」

「……そつかなあ」

「そつか。ここではみんなが君のこと、愛して、大切にしてくれると思うな。少なくとも僕らは、シリウスのことが大好きさ。な？ リーマス、ピーター？」

ジョームズが声をかけると、のぞいつとリーマスとピーターが体を起こす。

「う、わ……起きてたのか？　ずっと？」

シリウスはかあつと頬を赤くしてリーマスとピーターを見る。

「話に加わるチャンスを失つて……ごめん」

リーマスが申し訳なさそうに頭を下げる。ピーターは半分寝ているようだ。

「がんばらうよ、きっとみんな、愛してくれる」

だからまずは、自分自身のことを愛せるようにならなくなり。せひ

ジョームズが微笑む。シリウスは、何も言つことができなかつた。

*

小さなメモをふくろうのくちばしへくわえさせる。羽音を響かせて空に消えた影を見つめていたシリウスは、ふと人の気配を感じて振り返る。ジョームズだった。

「ふくろう便？　家にかい？」

「うん」

「なんて書いたの？」

「『グリフィンドールだった』。それだけ。君のおかげで、ふつきれた」

微笑み、シリウスはジョームズに手を差し伸べた。鮮やかな笑顔は、やつぱり変わらずそこにある。　きっと、愛されるつて、こういふことなんだ。

手を差し伸べれば握り返してくれる。辛いときには肩を支えて励ましてくれる。

少なくともあの列車の中、ジョームズが差し出してくれた手はとても大きくて、優しくて、自分に対する思いやりを感じた。そして今なら自分を変えられると、感じる。

どんなに手を伸ばしても、空を仰いで泣いても。

愛は、やつてこない。愛は気まぐれで、春風に吹かれるたんぽぽの綿毛のようなものだから。気ままに流れてきた綿毛がこじらにせつてきたとき、その姿に気づくことができるのには、それを受け入れる態勢が整つたときだ。ひとたび根を張れば、いつまでも強く根付く。心の深く暗いところにまで、根を伸ばす。

だからこの小さな愛を、精一杯大切にしよう。ずっとずっと待ち焦がれて、ようやく手に入れた愛だから。

そして力いっぱいに愛を返そう。それが自分ができる唯一のこと。愛を知らなかつたからこそ、愛のすべてを感じられる。愛してもらつた分、それ以上の愛を返せる。そうしてみんなのこころを、愛でいっぱいにしよう。

「I love you. I love everything.
And I can love myself」

静かに口にせたコトダマは、響きもなく消え去った。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。シリウスはきっとジーモーズに救われたと思つんです。少しでも共感していただければ幸いですvv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6256a/>

I can love myself

2010年10月28日07時43分発行